

# 光明禪寺

第495号

令和五年十二月

現在に活きる  
仏の教え

「できない」なんて、「やらない」の言い訳  
だよ。

たくさんもっている人より、たくさん与  
えた人の方が、はるかに偉いぞ。

あなたばあなたで、本当によくがんば  
りましたね。

無理はしろ、無茶はするな！

自分の人生だ。損も得も自分で  
背負って前進するしかないんだ。

電話 22-4127  
(210線) 4181  
090-7981  
9123  
FAX 24-3519

(県・市文化財指定安置所)  
〒910-0200 石川県十町南迫田二七六八

十二月の行事

一 釋迦如來御成道報恩会

八日 二時

一 暖天坐禪会

初一日(曜) 三日(曜) 朝六時  
初三日(曜) 十七日(曜)

一 地藏尊・水子供養

年中行事・納め法要

二十四日 二時

一 除夜法要 三十一日夜 11時20分〜

除夜の鐘 45分〜

・年賀欠礼のごあいさつと心対

年賀はがきを書く時期になると、年末ぎりぎりになってから、だれぞれの「喪中につき、新年のごあいさつを欠礼させていたいただきます」というはがきが届いたりするものです。午回しのよいかたは、郵便局のいうとおり、十二月二十日ごろに年賀はがきを発送してしまい、これはしまった、どうしよう、と深刻になったりします。また、こんなはがきがきたのだから、さっそくおわびとおくやみの返事を出して、速達で香典を送ってーと、あわてるかたもあるでしょう。けれども、大みそかや元日がお通夜というような例はなく、多くの場合、知人、友人の家にご不幸があったとしても、それは数か月前だったりして、こちらでは、欠

礼のはがきで初めてそのことを知るわけですから、親しい相手といつても、多少のへたたりがあるわけですよ。そこで、年末までに十日も半月も日にちのあるときは別として、おしつまったころのはがきなら、年が明け、松の内が過ぎているから、まず、おくやみの返事を差し上げる、というのはいかがでしょうか。お線香を日を改めて先方へうかがい、お線香をあげて、心ばかりのご供養料をお供えしても、必ずしもおそいことばありません。また、こちらから欠礼のあいさつのはがきを出す場合、前記の「喪中につき……」の紋切り型の口上だけでなく、「故人への生前のご厚情に対し……」という感謝のことばを添えるべきでしょう。できれば、たとえ二〜三行でも、故人のエピソードや口にしたことばなどを加え

ると、さらに味わいのあるぐあいさつとなりませう。

「喪中」の意味を深く考えるかたはごく少ないようです。しかし、正確にいうと、「喪」には「忌」と「服」の二種があります。「忌」は、近親者が亡くなったとき、あとに残った家族が、人づきあいをつしむ期間です。つまり、この期間、故人の肉親はけがれているので、通常の社会生活をしない、というしきたりがあったのです。「服」のほうは、しきたりというほどではありませんが、「忌」が終わったのち、引き続いて、故人の遺族が、主として祝いごとに加わらずにいる期間です。明治時代にできた法律には「服忌令」というのがあって、両親が亡くなったときは、「忌」が五十日、服が十三か月、夫の場合には、「忌」が三十日、

「服」が十三か月、妻だとすると短くて、「忌」が二十日、服が九十日、というように定められていました。第二次世界

大戦後、この法律は廃止され、一般のなうわしとして、「忌」は父母・夫・妻・子が十日、祖父母・孫・兄弟姉妹で五日、服は故人の冥福を祈る親族が適当に、ということになったのです。そこで、忌中であれば、年賀は遠慮しなくてはなりません。喪に服している間、つまり「服」の期間なら、必ずしも欠礼をしなくてもよいこととなります。もちろん、先方から發送される年賀はかきは、むしろ、ありがたくいたたいておくべきでしょう。あまり形式にとらわれないほうが、人づきあいは円満です。

・あなたの願い、みんなの願い

お正月にお寺参りをなさるかたは、必ず  
とっていいほど、なにかのお願いをなさ  
います。仏教ではこれを「願」といって「  
願を起す」「願を立てる」「願をかける」とい  
い表わします。が、いずれも仏さまに具体  
的な願いごと、たとえば、「病気が全快  
するようにとか、新しい商売がうまくい  
きますようにとか、受験する学校に入  
れますようにとか、そういうことをお祈  
りするわけです。アメリカやイギリス  
のことわざに「よいことがあると思っ  
ている人は、よいことにありつく」とい  
うのがあり、思っているだけではなく、  
そのことを仏さまのお力でかなえて  
いただく、というのが日本的な考えか  
たなので、  
「熱心なかたは、一度願をかけ  
ると、連日お参りにおいでになり、願  
いごとがかなえられたときは、お礼  
のお参

りをさします。願いをかけるのは、われ  
われ人間だけではありません。仏さま  
も、いろいろな願、たとえば、「悩み苦  
しみお人びとのこころを救いたい」とい  
うような願をおかけになっています。  
これを「仏の誓願」といいます。  
願をかけるとは、仏さまにくり返し同  
じことをお願いすることではなく、初  
心を忘れず、願いかなうよう自分  
にできることはなんでも実行する。  
ということでもあります。お正月には、  
仏さまにお願いと共に、実践の  
スタートをきることを、仏さまにお約  
束する。そうしてこそ、あなたのお願  
いは現実のものとなるのではないであ  
しょうか。

合掌